

収穫まで待つ主人

マタイ13：24～30

【毒麦の譬え】

良い種を畑に蒔いた。しかし毒麦も混ざって生えてきた。敵のしわざらしい。しもべはすぐに抜きとるか尋ねると、主人は収穫までそのままにしておき、最後に選り分けて、毒麦は集めて焼くために束にし、麦のほうは集めて倉に納めるようにしようという。



【良い麦】



【毒麦】

当時、悪意を持つ者が相手の畑に毒麦を蒔くことが実際にあった。

【譬えから見る3つのポイント】

- ①この世界ではいつでも良い種を滅ぼそうと待ち構えている敵（悪魔）の力がある。
- ②神の国（神のご支配）の内にいる者と、外にいる者との区別がつきにくい。
 - ・善人と悪人は見分けがつきにくい。
 - ・初代教会もイエス様の十字架の救いを捻じ曲げる、間違った教えであるグノーシス主義に悩まされた。
- ③急いで裁いてはならない。裁きは刈り入れの時まで待たなければならない。
 - ・サマリヤを訪れた時のヤコブとヨハネの反応（ルカ9：53）
 - ・イエス様の隣で十字架に架けられていた囚人（ルカ23：42）

裁きは最後に必ず来る。時を定めてそれをなされるのは神お一人。

後に続く2つの譬えばなし

- ①からし種はとても小さいけれど、育つと空の鳥が着て巣をつくるほど大きくなる。
- ②パン種は少量だけど、3サトン39キロの粉（100人分のパン）を膨らます。

「わずかなものが大きくなる」が共通している。

◆「天の御国・神のご支配」はからし種、パン種のようにローマ帝国の片隅で、気づく者もないほど小さく始まったが、やがて世界の中心ともいえるローマ帝国全体を変える力を持つようになった。更には中世ヨーロッパの時代を経て、世界宣教へと拡大した。

◆神のご支配は決して絶えない。毒麦などに侵食されることなく、宣教は大きく拡大するけれど、闘いの無い宣教もない。どの時代にも迫害との闘いがあった。

◆私たちが一番に心に向けることは、毒麦を抜くことではなく良い麦が育つ事。そこに力を注ぐ事。パウロが「今は恵みの時、救いの日です」（Ⅱコリント6：2）と言っているように、今はまだ刈り入れまでの猶予が与えられているから。

イエス様がいわれた。

まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。

ヨハネ 12：35

誰も働く事の出来ない夜が来る。ヨハネ 9：4